

## 九一 新年の歌

一年之計在于春、一日之計在于晨とは、故事に見る語であるが、元旦は吾邦に在ては、彼の、元日や神代の事も思はるる、の神聖崇高味を體したる日と爲し、吉辰吉旦などと稱して、苟且にも不吉なことを語れば、元日早々縁起でもないとい吐るが習ひである。隨て新年即元旦の歌は、原則的にめでたしくであつて、古來幾萬首とも數へ難い歌の中に、その除外例といふものは甚だ少ない。戦敗の歴史を持たぬ吾國が、如何なる非常時に在ても、元旦に悲哀の歌をあまり見ざること、輝かしき國光の餘彩を浴ぶる我等國民の幸福であらねばならぬ。

百敷の大官人は言はでもがな、悲憤慷慨を以て鳴る維新志士の歌にさへ、尙且つ新年早々激越哀調の風詠は少い。或は在つて傳はらざるが多きか、又は筆者の寡聞に屬するかとも思ふが、恐らくはその之れ少きことが自然であらう。兵馬倥傯の間と雖も、神州士民は常に綽々餘裕を存してゐるのである。さて例を探るに、遠き昔のことは稍夢幻的である、今、幕末から明治へ

の、諸名家の作品を假りて、其高風を謳うて見よう。

數ならぬ賤が伏屋も七五三はへて神代のままの春は來にけり

櫻東雄の歌。多くの志士中殊に氣象の峻烈を以て聞え、まつろはぬ奴ことごと東の間に燒きほろぼさむ天の火もがも、と叫んだ東雄である。安政七年櫻田事變の餘波に投獄され、絶食して歿した悲劇の主東雄である、荆棘の道を勤皇に奔走し、絶えて温泉に休眠しなかつた東雄である。しかも、新春に神代を偲びつつ、此靜穩平明なる詠出を試みてゐる、胸中何ぞ悠々たる。筆者會て所獲の東雄の短冊、左の一首が例の上代様假名の名筆で揮はねであつた、併て朗々吟すべきである。

元 日

あめのしたの御民残らず遊びつつ樂しかる日は今日にぞありける

舟よせし四方のえみしも今日こそは我が日の本の春を祝はめ

佐久間象山の歌。象山が幕末志士中の大先達であつたことはいふまでもない、和漢洋の學は

素より兵學に精しく、殊に歌道に勝れ、をさく専門歌人を凌いだことも周知である。所謂黒船の面々も、神國の元旦を長閑に祝慶するだらうの意、當時物情騒然たるさまが、此反語的歌詞中に含んでゐるのを見る。因云、此歌を一書の嘉永元年元旦作とせるは、六年か七年かの誤植であらう。また、羽前新庄藩主戸澤正令の歌に、

高光る日出づる國ゆ立つ春に西のえみしも今朝や逢ふらむ

千萬の奴が國も春や知る我が日の本の大御光を

といふのがあり、また中山忠能の家臣にして、明治天皇御降誕の時より、御側近に侍し奉つた田中河内介綏猷の、安政七年庚申の春の歌にも

五くさのえみしと共に仰ぎ見むこの日の本の春の光を

といへるがある、何れも象山の歌と異巧同曲である。此時代に於ける對外思念の、一致せるあらはれとも見るべき歎。

正令の歌は、稜威舎御集所載の由、大日本歌書綜覽所示であるが、天保十四年（嘉永五年より十年前）に卒した正令に、此詠あるは注目し値する。

都思ふ夢の中よりあけそめて心つくしに春は來にけり

三條實美の歌。太宰府幽囚中の作である。西竄七卿の首座であるのみならず、維新志士中の頭領と仰がれ、太政大臣大勳位公爵に陞り、病革るや天皇其第に臨幸あらせられ、位一級を進め正一位に叙し國葬を賜うた。贈正一位には三條實高・岩倉具視・近衛忠勳・徳川齊昭・島津齊彬があり、古くは和氣清麿・楠木正成・新田義貞・北畠親房・織田信長・豊臣秀吉・毛利元就・徳川光圀などがある。しかし生前正一位は實美以外に其例がないのではないか。誠忠純忠そのものである實美が、謫居の元旦に此詠ある、心境推すべきである。

○ 初老と嘆きし春も今日といへばはや七年の昔なりけり

藤田東湖の歌。別掲短冊所示の如く、辛亥の年の春の初によめると題がある。辛亥は嘉永四年、東湖四十六歳、黒船渡來前、維新史の序幕に、此一代の俊傑が登場せむとする時である。四十歳の時に、もう初老になつたかと嘆いてから、早くも七歳を経たかと述懐したるもの。

○ 君臣の世のうきことも今年より改まるべき甲子の年

中山忠能の歌。明治天皇の御生母中山慶子の父、従一位大勳位侯爵。文久四年すなはち元治元年元旦の詠、此年は恰甲子に該る、幕末の風雲は大勢既に決し、従來の憂患も改元と共に改まるであらう、しかも甲子は于も支も共に始まりである、との意である。

○  
かく列擧すれば、志士の新年詠は何れも時事詠に比して、濶和平調であるのを見るが、中には感情の昂れるものではない。

年月は改まれども世の中は改まらぬぞ悲しかりける

武市半平太の歌。これは前項中山忠能の歌と同じ文久四年元旦の詠である。彼は今年より時世の改まるべきを歡び、是は改まざるを嘆いてゐる。見地を異にする所以であらう。土州藩勤皇の領袖瑞山の名はあまりに高く、彩管に秀でたることも有名である。

○  
春されど籠にこめらるる鶯はしのび音いかにむせぶなるらむ

野村望東尼の歌。是も亦文久四年元旦の作、牢にこめれる人を思ひてといふ題である。勤皇としての聲響高く、當時志士の間を斡旋し盡忠報國の誠を致した。大隈言道に就て歌道書道

を學び、變ながら之を詠ぐし、家集を向陵集といふ、豪傑の輩に伍しても流石に女は女である  
元旦の懐ひはゆくりなくも、幽囚中の同志の上に趨つた。

○  
九重のなやむ御心おもほへば手にとる屠蘇も飲まれざりけり

吉田松陰の歌。己未元旦獄中作とある、己未は安政六年松陰三十歳、すなはち此年十月小塚  
原に刑死したのである。獄中にも元旦だけは屠蘇の恩典があつたのであらう。しかし、それを  
安らかに口にすることは出来なかつた。今、そこどころではない、雲の上を拜察し率ればとい  
ふのである。

○  
さて、叙上は何れも明治以前に屬する、元旦作歌に就て述べたものである。大風一過さしも  
の幕末史も終焉を告げ、めでたき明治の新政となつた、國事に奔走し、幸に生を保ち得た人々  
は、何れも元勳としての待遇を得、榮光輝く新年の歌は、長閑に高らかに詠ぜられた。

君が世の千代をことほぐ鶯の初音のどけき朝ぼらけかな

大久保利通の歌。題書は庚午歳同詠鶯入新年語とある。庚午は明治三年なるが、此題は明治

十一年の新年御題となつてゐる、或は庚午でなくてそが詠進であるか、利通は此十一年五月十四日に暗殺された。

○  
起き出でて日毎に向ふ山ながら年立つ今朝はことにしありけり

木戸孝允の歌。題は新年山とある。孝允は前名桂小五郎、彼の大久保利通・西郷隆盛と共に維新三傑と稱せられた。何の屈託もないならかな歌である。

○  
昨日まで雪ふる年の山の端ものどかに霞む暁の空

毛利慶親の歌。防長の太守、維新の功臣其藩中より出でしもの數を知らず、公武の間常に幹旋これ努めしこと周知である。此歌は別掲短冊所載のもの、題書は元旦霞、歌意或は皇政復古を含むか、慶親冷泉様の書風を學び之を能くした。

○  
長門路や、心づくしの、數々に、憂しと見し世の、夢もまた、いつしか覺めて、九重の、  
都の春の、酒ほがひ、語らひかはす、今日の樂しさ

土方久元の歌。慶應四年正月元旦、同志相寄り酒を酌みて無事を祝ひたる席上にて、と題せるもの、此年はすなはち明治元年である。歡呼の情溢るゝさまが見える。

○ 異國に朝日の御旗ひるがへし敵をさかんに祝ふ初春

桂太郎の歌。題は海城の元旦とある。日清戦役に際し、陸軍中將を以て出征し、海城、紅瓦塞に戦功不尠、歌は當時所詠のもの、實況實感敢て巧拙を論すべきでない。

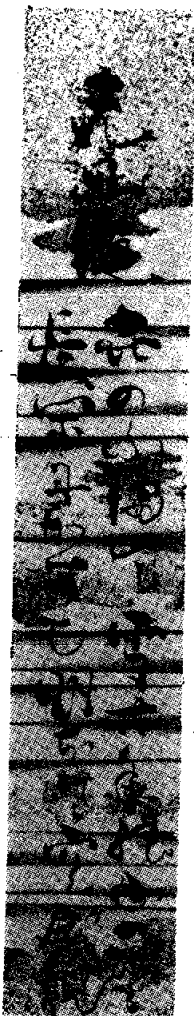
○ 最後に乃木希典の一首

千早振神代ながらの朝日影年の初に仰ぐたふとさ

辛亥の元旦弦卷山を越えて、熱海にまします皇孫殿下へ伺候せる道すがら、と題せる三首の一である。辛亥は明治四十四年、月並なるべき此歌も、時、所、人、場合をそこに描けば、武門の典型乃木大將が、肅然として元旦奉伺の途次、燦たる旭日を仰げる情景、さながら眼前に浮ぶではないか。



毛利慶親筆蹟



藤田東湖筆蹟

